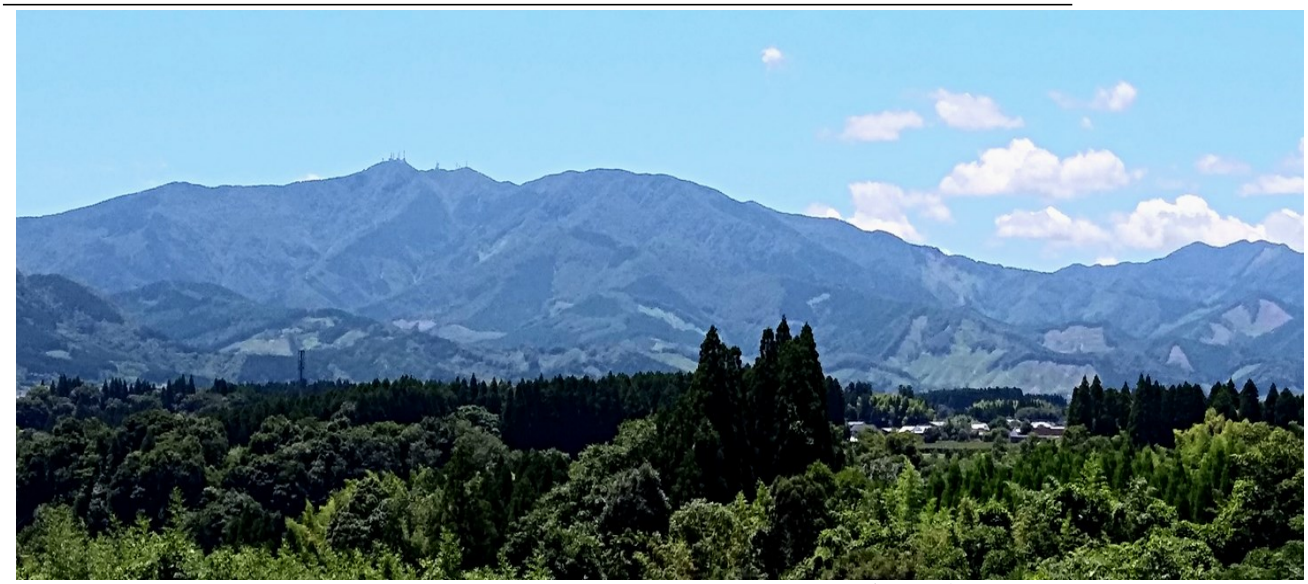
公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第73号



鰐塚山(1,118m) 宮崎市田野町灰が野より

令和2年度(2020年)全国支部合同会議(9月26日)・報告

支部長・荒武 八起

今年度の支部合同会議も例年同様、東京(プラザエフ)で開催された。しかし、今年はコロナの影響から縮小した形となり各支部からの出席者も例年は2名ずつであったが1名となった。また、インターネット会議システム(Zoom)での参加も可ということから宮崎支部はこれを選択した。半数以上の支部がZoomでの参加であった。

以下に会議の概要を記す。会議は14時に開始され18時までの4時間であった。会長の挨拶に始まり 1.支部事業委員会(坂井副会長):支部特別事業補助金の配分、支部懇談会の今後のあり方など 2.財務担当(古川常務理事):支部会計の注意点等について 3.記念事業委員会(飯田理事):日本山岳会120周年事業について 4.山の日事業委員会(萩原常務理事):第2ステージとしての山の日のあり方について 5.永田理事:年次晩餐会中止の件、今後の会議のWebの活用、会員名簿作成等について報告があった。

この中で今後の支部活動に大きく関連するものとして、120周年記念事業の一つに山岳古道調査がある。これは古道を文化的・歴史的・地理的な側面から探索・調査し記録を残すことを目的としている。具体的には各支部が3～5本の古道を推薦・調査・記録し報告する。各支部からの報告を受けた山岳古道調査プロジェクトチームはこれを書籍として制作するというもので令和7年度(2025年)の発刊を目指す。宮崎支部でも先ずは会員各位のご意見を伺いながらこの趣旨に該当する古道の発掘・推薦・選択に早速取り組む必要がある。

8月の支部事業委員会の会議で「今後の全国支部懇談会のあり方」について討議された内容が紹介された。その中で 1.現在支部は33あるが毎年の持ち回りでは開催サイクルが長い 2.近年、イベント的な要素が多くなり会員数の少ない支部では開催の負担が重い 3.参加者100名以内として、春・秋に分けて開催地を変えてはどうか 4.支部の周年行事に全国支部懇談会を一緒にしてはどうかなどの意見があり、今後の懇談会のあり方について提言したい旨の報告であった。

以上の各種報告の後、各支部3分ずつの割り当てで、コロナの影響下での支部活動について発言が求められた。各支部で温度差はあるものの総じて3月から8月あたりまでの各支部でのイベントや山行は中止など大幅に変更されたようである。宮崎支部も現況を報告し、併せて第36回全国支部懇談会の中止に至るまでの経緯とその間における本部および各支部の協力・支援に対して感謝の意を述べた。初めてのWebであったが、在宅のままでの会議参加はとても有益であると感じた。

[9月定例山行]
えびの岳 1,292m　9月13日(日)

中武 照子 (A014)

久しぶりの参加で私にとっては初の「えびの岳」登山である。山岳会の皆さんの足手まといになるのではと心苦しく思いつつ河川敷の駐車場に向かった。12名が3台の車に乗り込んで7時に出発。先ずはコンビニでお昼の弁当を買いゆーぱる野尻でトイレ休憩をとり、御池経由でえびの高原へ。道中、車内で黒い翅に白い模様の蝶のことが話題になり盛り上がった。途中の休憩で降り立った御池にまさに話題になったその黒い蝶がいた。偶然とはいえ、ビックリだった。帰ってから調べたら「鎌倉蝶」という黒アゲハの仲間だと判明した。「蛾じゃないですか」なんて言ってすみません。

えびの高原に駐車後、ゆっくりとなだらかな山道を赤松やヒメシャラの木々に包まれながら登る。足元には様々な種類のきのこが見られ、特に紫色をしたキノコは珍しかった。また、おなじみのウリハダカエデ、シキミ、サルトリイバラ、ノリウツギ、ミヤマキリシマ等の木々も多く見られた。特にきつい場所もなく歩くことができた。途中、木々の隙間から錦江湾に浮かぶ桜島と遠くに開聞岳を眺めることもできた。

頂上と思われる場所には標識は見当たらず、今は少なくて珍しい「四等三角点」という国家基準点があった。そこで昼食をと座る場所を探していた時、後発の多田夫妻に会う。まさか頂上で会えるなんて感激。昼食後、キャンプ場を目指し美しい赤松林が続く道を初秋のえびの岳を満喫しながら下った。

＜参加者14名＞多田登美子・服部澄子・橋口三枝子・中武照子・前原満之・荒武八起・日高研二・乾正太郎・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・畑島良一・四宮林三・川越政則

＜コースタイム＞

大淀川ゴルフ場駐車場発 7:00～道の駅ゆーぱるのじり 7:55～御池 8:30～えびの高原 9:15(9:30)～展望所 10:50～四等三角点11:10(多田夫妻合流・昼食11:35)～キャンプ場広場 12:05(小休止)・えびの高原発 12:50～ゆーぱるのじり 13:55(14:15)～大淀川ゴルフ場駐車場 15:00

[グループ山行]
向坂山1,684m・白岩山1646m 8月9日(日)

橋口三枝子（14885）

キレンゲショウマの咲く山

連日猛暑続きの中、キレンゲショウマが咲くころとなり九州最南端のスキー場のある向坂山へ友人と出かける。今、コロナで密を避けながらの行動が求められている。もちろん車内ではマスク着用で。3時間かかり五ヶ瀬のごぼう畑登山口駐車場に着く。この時期キレンゲショウマ目当ての登山者が多く訪れていた。ごぼう畑の駐車場から10分程歩いたところに群生地はある。うつむき加減に気品をただよわせて光沢のある黄色花が咲いていた。蕾もたくさん見られこちらもまーるく可愛い。キレンゲショウマは限られた場所にしか自生しないと言われる希少植物、大切に保護されている。

充分堪能しコースに戻り向坂山へ向かう。暫く炎天下のスキー場のゲレンデを登って行く。振り返ると阿蘇の山々を見ることができた。ゲレンデを抜け登山道に入るとヒヨドリバナにアサギマダラがたくさん乱舞していた。向坂山山頂に大きな山桜があるのだが根っこがむき出しになっていた。風害のせいなのだろうが、たくましく青々と葉っぱを茂らせていた。この山系の桜は霧立山桜と言われ、ここにしかない貴重な山桜なのだ。

登山道にはあちこち鹿の害を防ぐためにフェンスが設置されている。白岩山までは緩やかなアップダウンで気持ちのいい緑の中の歩きだ。白岩山直下付近は、花の宝庫で、いろいろな花を見ることができる。ちょっとした高山植物らしき花も。ソバナ、メタカラコウ、ホソバナシュロソウ、ベンケイソウ、ウスユキソウ、名前も知らない花もいろいろあり、山頂にはここにしかないイワギクが有名だが今は時期ではない。林の中での昼食では下界の暑さを忘れひんやり。「夏でも寒いくらい涼しい所」と表現された記事を目にしたが、まさにその通りだと思った。下山の登山道では、小さいミヤマツチトリモチも見られた。これは、前を歩かれていた人が見つけ教えてもらいラッキーであった（他にもいろいろ教えてもらった）。最後に登山口の冷たーい水に体もひんやり、気分爽快でゆっくり花を愛でながらの歩きを楽しんだ。

＜参加者4名＞橋口三枝子・一般参加(矢野・東・篠原)

＜コースタイム＞

宮崎発 5:00～ゴボウ畑登山口 8:20～ｷﾚﾝｹﾞｼｮｳﾏ群生地～向坂山 10:05～白岩峠 10:50～白岩山 11:15(12:05)～登山口 13:20

[グループ山行] 猪八重渓谷 8月16日(日)

畑島良一(13900)

コロナ禍で人は歩みを止めているが、自然は季節と共に移り変わる。長い梅雨が過ぎ、暑い夏がやってきた。新緑から深緑へと移り変わり、渓谷の清流も人と馴染む心地よい温度となってきた。8月になり、子供たちも親も懐かしさと思い出を詰め込もうと清流に親しむ。猪八重渓谷は私たちにとっても、もやもやした気持ちを開放できる良い場所であった。自然林に包まれ、適度なアップダウン、整っている遊歩道、清流と爽やかな滝等は心身共にリフレッシュできた。

8つの堅固な橋を渡り、草木の名を思い出しながら和やかに歩むと、滑り台状の「流合いの滝」。水と戯れた幼い頃を思い出す。その上部の「5重の滝」で長い昼食。渓流靴を履き水と戯れる我が支部の昔の若者数名。後発の谷口・多田夫婦と合流。滝の落ち口には10cm程度の「アブラハヤ」が多くいる。周囲の草を投げ込むと寄って来る。魚との一時のふれ合いに心和む。下山途中皆で川につかり休憩。身も心も涼やかな自然にどっぷりつかった一日であった。

＜参加者13名＞ 谷口敏子・多田登美子・栗林淳子・橋口三枝子・荒武八起・谷口菊美・武田芳雄・多田周廣・畑島良一・四宮林三・一般参加者(栗林・渡辺・加藤)

＜コースタイム＞ ナフコ駐車場7:40 ～ 猪八重渓谷駐車場8:30～五重の滝11:20～八重渓谷駐車場14:15～ナフコ駐車場 15:15

五重の滝

ギボウシ

イワタバコ

[グループ山行] 双石山 509m 9月21日(月)

荒武八起(10735)

看護学校の生徒さん(女性2名、男性3名)を双石山に案内する事になった。清武のホームセンター駐車場で待ち合わせ、自己紹介の後2台の車に分乗して出発した。午後には雨になるかも知れないという予報で空模様が多少心配であったが、幸い山行中は薄曇り程度で山歩きには最適な条件となった。

5名のうち4名が双石山は初めてということで、様々に変化する自然に感嘆の声をあげていた。若人の訪問に樹々も身を震わせて歓迎しているようであった。鳥の声・風の音、そして何よりも彼らの楽しそうな会話に久々に爽快な気分になった。

9時前に登山を開始し、ほぼ予定どおり頂上で昼食をとり13時には九平登山口に着いた。30歳代の学生も何人か含まれており、何らかの社会経験の後に専門職を目指して勉強している彼らの眼は輝いていた。丸野駐車場で解散式と称して感想など話してもらった。全員が双石山の素晴らしさ、登山がとても楽しかったことなどを述べた。この好青年たちが看護師として医療・社会に貢献すること、そして趣味の一つに登山を加えてくれることを願いつつ帰路についた。

＜参加者9名＞ 橋口三枝子・中武照子・川越政則・荒武八起 看護学生 (小玉・長谷川・熊谷・山岸・米田)

＜コースタイム＞ 清武ナフコ出発8:00 ～小谷登山口着8:20 ～小谷登山口発8:35 ～天狗岩9:05 ～第二展望台9:40(休憩10分)～山小屋10:30(休憩20分)～山頂11:30(休憩30分)～九平登山口13:10

山頂

天狗岩

山小屋

宮崎半移住、8年間の思い

畑島良一(13900)

宮崎への道

温暖で山があり、釣りができ、歴史的思考を満足させる地域で畑仕事ができる土地。そして関東での諸組織と隔たりが可能、年金ですべてが賄える。それが定年後の移住条件であった。宮崎の地を踏んだことがなかった。要は土地勘は皆無である。全国を飛び回っているマラソン好きの妻と相談し、殆んどの条件は宮崎にあるとのこと。案として「綾」「木花」が浮上。条件が整なわず、宮崎市内に決めた。妻はこの移住から降り一人移住となった。家の整理整備・自家用車2台の整備・庭の手入れ・JAC同好会の例会・山行の出席運営のために、毎月神奈川を往復している。

宮崎～神奈川間は遠い。高速料金は1スパン1000円の時、月1回の往復が5000円未満。十分な条件と思ったが、残念ながら泡と化した。往復は軽自動車で一般道とした。移住後2年間は、東海道1号線～山陽道2号線～国道3号線で宮崎県を往復した。意外にバイパスが多いが、名古屋・奈良・大阪・兵庫・岡山の交通渋滞と夜間のトラック群には閉口した。それを迂回するために、甲州街道・木曽街道・山陰道・九州に入り10号線に変更。距離は1450kmと長丁場であるが、渋滞やトラック群は少ない。代わりに夜間は鹿・タヌキ・イノシシには神経を使う。たまには鳥がフロントに衝突。

冬季の山陰道付近は強風や降雪が厳しい。11月から5月中旬までスタッドレスを着用する。また、長丁場で夜が2晩経過する。神奈川からは関ケ原・若狭・舞鶴・鳥取付近と九州に入ると暗くなる。宮崎からは山口・島根と岐阜・長野・神奈川は夜である。その為月2回通過する国道はよく見れば新鮮に映る。この8年間、途中で仮眠から目覚めると、宮崎・神奈川どちらに向かっているかが判断出来ないことが多くある。必ず左側空き地に止めるようにしている。当初の軽自動車は20万km、妻にとられた。今はバン型自動車で20万km。関東での山行・宮崎での山行や畑仕事で計40万kmを走行した。

< 参考経路 > 相模～甲斐～木曽～恵那～関ケ原～近江～若狭～鳥取～出雲～石見～長門～長府～豊前～豊後～宇佐～日向

自然・風景

宮崎には魅了される自然・風景が多い。広々とした畑の向うには針葉樹の森、その奥になだらかに横たわる山並み、特に杉の先端が続く様は絵心があれば筆を取りたいだろう。また竹林にあたった強い風による揺らぎは怪獣に似ていて、いつまでも見飽きない。畝の整った緑の稲穂は何とも言えない。そして冬季は竹を組み上げた大根櫓や切干大根や「イカンテ」を見ると、気持ちがほんのりとする。

借地耕作している周辺には、野蒜・蕗の薹・フキ・たけのこ・ドクダミが自生しており食している。ドクダミは乾燥粉砕しお茶として重宝している。耕作での大敵はイノシシ・ハクビシン・タヌキ達。特にサツマイモ畑を掘り起こすヤカラには閉口する。孟宗竹の皮を拾い乾燥させ10枚単位で結束し販売する手伝いも経験できた。宮崎名物「アクマキ」はもち米を竹皮に包み竹皮紐で結ぶが難しい。煮ている途中に中身が飛び出したりした。古くからの生活様式から生存の糧を知見できた。

農家の整理された庭先と裏山に咲く小さな花々は、花屋のどの花にもまして可憐で美しい。年配のご婦人が庭先で箒を持って佇んでいる姿はなおさらである。渓谷や小川では、魚などを探してしまう。小径でのカエルやトカゲとの対面は追いかけるほど嬉しい。幼い頃、手のひらで遊んでいたことを思い出す。耕作しているとカエルやオケラ・コオロギ・ヤスデがおり、モグラは小さくとても可愛い。

宮崎平野の広がりは興味深い。他の集落へ行くために幾つかの小峠を越える。そのたびに同じ広がりを持つ平野に接する。俯瞰すればヤツデの葉を重ねたように思える。かつては多くの古豪が地を守り独自の文化を営むのに良い地であったと思われる。

山岳地

宮崎に住み1週間後、暇で双石山へ向かった。塩鶴登山口周辺に車を止めラウンド。九平から塩鶴までマラソン。時間が余り斟鉢山を往復。向こう見ずな登山であった。宮崎の山は登山難度が高い。低山ではあるが壮年の山塊に似て、危険が内在している。自然の脅威に晒された地質は侵蝕気味となり、隆起により上部に位置する堆積岩などは覆土が少なくなっている。東北山地は覆土流出が少なくなだらかな山容の幼年期、中部山岳は全体的に急峻であり老年期に近い。宮崎の山地は植生が豊かで地質全容を覆い隠している。尾根筋は比較的に細く、巨大な堆積岩が目に付く。表土流出は水脈に変化を生じ、やがては植生への影響が考えられる。

登山人口が多い中部山岳は、岩稜地を除いて道迷いは少なく明瞭な登山道がある。登山者が少ない宮崎では、先駆者が付けた目印が朽ち、高度なルートファインティングを強いられることがある。私も青井岳

周辺で2回、岩壷山・花切山で2回ほど迷っている。沢筋や細い尾根は大雨により地形が変化するため要注意だ。数年前、台風で尾根斜面が崩落しルートが無くなったため沢筋を下降。沢の表土も流出し岩盤が露出。ザイル使用で切り抜けた。宮崎の低山は、高山にない楽しみ方がある。

古代探訪

歴史の断片は身の周りに多くある。考えればそれだけ解明不可能となることこそ、余計に知的ロマンを微々と追いかける。これが移住目的の一つである。小さい部屋に40冊以上の古代に関する歴史書籍がある。納得できるものは少ない。有名な神社も見学したが得るものは少なかった。神社などの形あるものは朽ち変容する。古墳・出土品・伝承（神話）は残る。それらから背景・地勢を結び付け、比定し歴史ミステリーハンター気取りで楽しんでいきたい。

生目・西都古墳群は300～400年代、この時代での大型古墳、宮内庁管轄にもなっており、倭国時代・邪馬台国と関係がないわけがない。持論であるが邪馬台国は宮崎にある。そして別に大和政権の基礎の一部も宮崎にある。

月2回通過する出雲も興味深い。500～600年代であるが、国譲り・須佐之男命・元伊勢神社・桃太郎伝説と大江山の鬼退治・因幡の白兎・荒神谷遺跡（大量な銅剣・銅鐸）などは大和政権誕生に関わっている。半島との関係も見え隠れする。また、弥生・古墳時代の民族動向とそれ以降の人・文化導入は宮崎にも関係している（古くは徐福伝説や大和政権強化の基となった白村江戦いによる百済王族滅亡など）。

［余暇談義］

馬場あき子歌集「あさげゆふげ」
越冬するゴキブリの章より

久峩慧子（12563）

古代からの同居ものなるゴキブリは
　　源氏の恋の糊も舐めけん

この「越冬するゴキブリ」からは、作者の古典に対する知識の深さ、広さ、古語への幅広い理解に圧倒された。この歌の下の句「源氏の恋の糊も舐めけん」に惹かれた。源氏物語が書かれた和綴じの本の糊も舐めただろうという想像を「恋の糊」と表現されていることにさすがだと思われた。今の我々の生活にも同居し身近な（？）ゴキブリに対する見方が私自身すこし変わった。今でもただ憎たらしいだけの存在に変わりはないが・・・。その他にも次のようなものがある。

夕顔の家に同居するゴキブリも
　　ゐたはずかそけく母屋をわたりて
清少納言の衣の下あゆむ蚤はあれど
　　ゴキブリはかかれずいといと憎し
テレビ台の裏にゴキブリ棲みをりて
　　深夜わがまえを静かに歩む
われの眼にとまりてふとも居竦みしゴキブリは
　　やがて疾走したり
わが置きし毒餌を食べしゴキブリが
　　日中出できて死んでみせたり
二匹ほどその姿知るゴキブリの
　　一匹は死ねりのがりしは雌
山積みの本の隙間にて子を産まん
　　雌ゴキブリのつややかな翅
台所の残菜にゆかず部屋に棲む
　　ゴキブリを見る飼ひ主のごと
一匹くらゐはゆるしてやらんと思へども
　　ゴキブリは一匹死ねどつぎつぎ
ゴキブリが愛しあふなど思はねど
　　相つれて入る狭間あるなり

これらにも思わず笑みがこぼれた。私の感想だが、ゴキブリは人間が生まれ出たずっと以前から存在していたとは、全く知らなかった。ゴキブリは、「生存力」「繁殖力」がとても強くて、人間が滅亡してもたくましく生き続けるとのことである。そういう生き物と、同居しているとは～あぁ、恐ろしや！

＜ゴキブリについて＞

①ゴキブリの起源は、3億年前ぐらいではなかったか
②人間との同居は縄文時代からとか
③ゴキブリの存在が日本の書物に初めて登場したのは平安時代とか
④ゴキブリの異字は「御器嚙(ごきかぶ)り」とも

翁草育苗記 その1

谷口 敏子(13062)

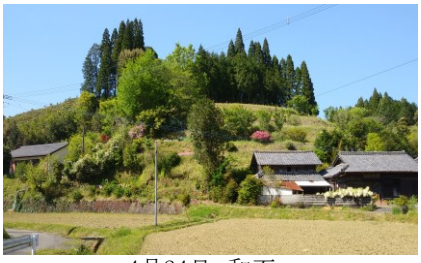
翁草に魅せられて

宮崎支部岳友数人でスマホLINEアプリを楽しんでいる。これがなかなか楽しい。日高研二さんの市民の森の季節の花だよりや、荒武八起さんの釣りだより・農作業だより・花だよりや、それに最近はまり出した短歌が付いてくれば返歌をしたりと毎日覗いて見るのが楽しい。そんな3月のある日、荒武さんより翁草の一枚の画像が届いた。その美しさに思わず声を上げた。白い産毛にくるまれた深紅の花房の中に黄色の花芯を覗かせ、恥ずかしげに俯いて咲く何とも美しい画像にしばらく釘付けになった。山の花の女王が駒草なら、野草の花の女王はまさに翁草ではないか。私はこの花が大好きで3月の田植えの頃になると何度か和石(よれし)に出かけカメラに撮った。和石の人々は希少種翁草を大事に守り育て、見学の人々を庭や畑を通して快く受け入れて来られた。

里人の守り継ぎ来し翁草
　　腹ばいて撮る和石の丘に

「苗が欲しいなあ～　どこにも売ってないなあ」と呟いていた後日、「種を貰いに行こうか」という話が持ち上がった。薩摩街道への道案内を兼ねて仲間4人で和石へ・・・・誰もいない和石の丘はまさに翁草の名にふさわしく、細い銀髪のような長毛を風に靡かせていた。坂の小道にいたおばあさんに許可を得て、指ですごいて種をいただいた。おばあさんは95歳。家の周りや道筋まで数十種の花を育て、どの花も見事に美しい。大樹の白いモッコウバラが道から崖まで覆っていた。おばあさんから向こう山にエビネランを育てているから見てくれと促され見にいくことに。杉林に続く錆びかけた鉄梯子を登ると一同「わー凄い」の連発。黄、白、ピンク、黄緑など多種多様のエビネランがぎっしり咲き誇っていた。95歳にしてこの山に登り手入れをしているというこのおばあさんに感服。話にも張りがあり話していておもしろい。元気をもらって再会を約し帰路についた。

さて、帰宅して早速種蒔き。種は細い白髪の長毛の根のゴマ粒ほどだ。畑の野菜の種蒔きは私の仕事で野菜は育ててきたが、花の種から苗を育て花を咲かせたことは一度もない。庭の花々は手のいらない宿根草や樹木花が多く本当に自分にできるのか新たな挑戦にわくわくする。師匠は勿論荒武さん。教えのとおり種蒔き用の砂を買い平鉢に撒き、残りは石の下影や樹間に蒔いた。「芽が出た」「双葉になった」とLINEで交換が始まった。葉が3～4cmになったところで10cmほどの小鉢に移植。翁草は髭根が長く少し手間取った。深く地中に根を張り風雨や寒さの厳しい草原を乗り切る力強さはここからくるのかと、移植しながら愛おしくなる。欠かさず陽差しや水の加減を覗き、少しずつ育っていくのを見守った。私のは師匠より少し育ちが遅いが順調だ。表面が乾かないように苔で覆う。次は本植えの少し大きい鉢に植え替えぐんぐん育っていくのが何とも楽しみである。地面に蒔いた種は大株に育った。やはり大地の力は凄い。夫が草として抜かないように棒を立てた。晴天が続き少し葉が萎れてくると「翁草が水が欲しいと呼んでるよ」と夫が呼ぶ。翁草は私の管理下と思っているらしい。さて、私の初めての「花育て」。本当にあの翁草の花をわが庭に咲かせることが出来るだろうか。この秋から冬をどう乗り越えていくか不安でもあり楽しみでもある。


4月24日　和石

銀髪をなびかせる翁草

採取した種子

5月20日　双葉になった

7月12日　小鉢に移植

10月6日　鉢から溢れる程に

【自然保護委員会】「森づくり活動」双石山小谷登山口育林作業 7月11日(土)

他団体との協働作業

前原満之(9878)

我々は今まで当会の3つの森で育林作業を行ってきた。今回は今年の春、宮崎市山岳協会として小谷登山口の杉の伐採跡地に植樹した広葉樹の草刈りである。我々も加盟団体として参加し、合計約30名が参加した。作業時間は約40分。カヤなどの草、及び先駆種のアカメガシワやカラスザンショウ等を切り、苗木に陽が当たるよう手入れした。時間も短く全部を刈り終えるまではいかなかった。また春の植樹では本数も限られたため植樹されていない所が散見され、山岳協会としては来春、補植を計画するとのことである。

3月21日(土)の植樹の様子
ヤマザクラ等の広葉樹約50本を登山道脇を中心に植えた。

7月11日(土)の草刈り作業
植樹した3月に対し、草や他の木々が繁茂している。

〈草刈り作業参加者〉
当会の参加者12名(谷口敏子・服部澄子・橋口三枝子・前原満之・荒武八起・谷口菊美・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・畑島良一・四宮林三・川越政則)

たおやかに両翼を広げる鰐塚山(1,118m)

今回の表紙には鰐塚山を選んだ。日南山地最高峰、一等三角点のこの山は田野町・北郷町・三股町の町界に聳え、頂上には多くの放送塔がある。

山頂からは東に日向灘、北に宮崎平野・尾鈴山、北西に市房山を含む米良三山・掃部岳・釈迦ケ岳・大森岳、西から南に霧島連山・都城盆地・桜島・開聞岳・牛の峠、そして大隅半島の山々が連なって見え、その眺望は360度遮るものはなく壮大である。

山名の由来は「古事記」や「日本書紀」にある海幸・山幸の物語にまつわる。すなわち、釣り針を無くした山幸彦が釣り針を見つけてもらい地上に帰る際に山幸彦を運んだ鮫(鰐の古名)が塚をなしたという伝説に基づいている。青島の西の斟鉢山(くんぱち山)は山幸彦の御陵とされる。

現在の登山道は北東尾根の単調な急登である。以前の登山道は楠原から妙見神社を経由する道でアップダウンが多く長いが、豊かな自然を満喫できる素晴らしいコースであった。

先日、宮崎市田野支所に出向き、旧道復活の意向を聞いた。即答はいただけなかったが、私以外にも旧道復活を願う岳人も多いということであった。吉報があることを心待ちにしている(文責・荒武)。

[事務局だより]

支部行事予定（10月～12月）

月 日	行 事 名	標高、他	備 考
10月24日(土)	斟鉢山 (くんぱち山)	500m	宮崎市
10月31日(土)	植樹・補植	双石山小谷登山道	宮崎市
11月2-3日(月火)	白岩山・向坂山	1,646m/1,684m	五ヶ瀬町 3日だけの日帰りも有り
11月6日(金)	257回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	11月5日開催のところ会場の都合で変更
11月21日(土)	定例山行・尾鈴山	1,405m	都農町/木城町
12月3日(木)	258回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	
12月12日(土)	清掃登山	双石山登山道周辺	清武町

支部会務報告(8月～10月）

月日	事業・行事	開催場所	人員	備 考
8.1	臨時役員会	頼田宅	11	コロナの影響で山研中止のため
8.6	9月定例登山研究会	宮崎市中央公民館		コロナの影響で中止
8.11	山の日イベント	双石山		コロナの影響で中止
8.16	定例山行	猪八重渓谷		コロナの影響でグループ山行に変更
9.6	定例山行	尾鈴山		コロナの影響で中止
9.19	定例山行	えびの岳	14	
9.26	全国支部合同会議	東京		宮崎支部はWebで参加
10.1	256回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	20	

事務局からのお知らせ

グループ登山の届け出の厳守：グループ登山の届出が完全ではないようです。グループで登山される時は、必ず事前に登山計画書を作成し事務局に提出して下さい。

恒例の「宮崎ウエストン祭」および「中央公民館まつり」は、コロナの影響で中止することとなりました。

編集委員会からのお願い

支部報は年に4回発行しておりますが、原稿の集まりが順調でなく苦慮しています。定例山行や支部行事に関する原稿は編集委員会から会員の皆様に直接執筆をお願いしておりますが、グループ山行については十分に把握できていないのが現状です。山行に関するものはもとより、随筆・詩・短歌・俳句など何でも結構ですので皆様の積極的な投稿を何卒よろしくお願いします。また支部報に関するご意見などありましたら編集委員会へ忌憚なくお寄せください。

編集後記

コロナウイルスの流行も完全に終息したとは言えませんが、少しずつ良い方向に向かっているようです。これまでは山行も思うように出来ませんでしたが、季節は秋。錦繡の山々が待っています。大いに山歩きを楽しみましょう。そしてその感動を是非編集部まで届けてください。皆でその感動を分かち合いたいものです(久峩)。

この明るさの中へ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美くしさに耐えかね
琴は静かに鳴りいだすだろう
八木重吉

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 第73号
発行責任者：荒武 八起
編集委員：久峩 慧子(責任者)、拵 恵子、谷口 敏子、多田 登美子
事務局：日高研二
〒880-0933 宮崎市花山手東2丁目17-11
Tel, Fax 0985-52-6685, 080-1766-1207
E-mail： k-hidaka@har.bbiq.jp
口座: ゆうちょ銀行 記号17330-2 番号09336371
名義人：(社) 日本山岳会宮崎支部